

# 世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

## Home sweet home オーストラリア

## ホーム、スイート・ホーム



猛烈な競争が続く農機製造業界では、製造コストが業績に与える影響が大きい。このコストこそ、この度CNH社が、サトウキビ収穫用ハーベスタの製造工場をオーストラリアからブラジルに移転する決定的な理由となった。

オーストラリアのクィーンズランド州とニューサウスウェールズ州の、業績低迷に苦しむサトウキビ農家にとって、2004年に浮上したこの計画はうれしくない知らせだった。ブダバグ市にある古い工場の製造コスト、労働賃金、運送料金など財政面が綿密に調べられたが、数字は好ましいものではなかった。その結果、残念なことに、有名なオーストフト工場の閉鎖、そしてCNH社傘下にあるケースーH社がブラジルに持つピラキカバ工場への製造移転が決まった。

CNH社にとってハーベスタ製造の新たな拠点となるこの工場を訪ねると、同社がなぜ最終的に移転を決めたのかがはつきりわかった。最新設備を有するこの工場は、ブラジルのサトウキビ生産の中心地であるサンパウロ州にあり、絶好の地の利を備えている。さらに、いま南米は世界のサトウキビ生産の35%を占め、この地域で使用されているサトウキビ収穫用ハーベスタは世界全体の45%とかなりの割合だ。しかも、この割合は今も急速に増加している。CNH社の特殊農機部門の責任者、カルロス・エドゥアルド・ヴィスコンティ氏によると、ブラジルで現在生産されるサトウキビで機械収穫される分は25%にすぎず、今後安定した販売を期待できるといふ。

ケースーH社がオーストフト工場を買収した1990年代半ばは、毎年およそ100台余りのサトウキビ収穫用ハーベスタを製造していた。だが、ブラジルへの移転が決まる前では、年間製造台数はわずか10台ほどにまで落ち込んでいた。ブラジルの工場は交代勤務体制なしで年間240台の注文に応じられる製造能力をもち、特殊散布機、条播き機、コーヒーハーベスタも生産する。以上のような経緯はあるにせよ、オーストラリアの農家は、同国のサトウキビ市場がCNH社にとって戦略的に重要な存在であることに変わりはないと聞いている。



ブラジルのピラキカバ工場にて、出荷を待つハーベスタの前に座るCNH社のカルロス・エドゥアルド・ヴィスコンティ氏。

## Keeping up appearances フィンランド

## 道路保守にトラクタが活躍



フィンランドでは道路保守は大変な仕事となる。国内には約43万kmの道路があり、そのうち約7万8000kmは公道だ。そのほか日常的に利用されている私道が10万kmあり、さらに森林道路と湖畔の夏用別荘地に通ずる幹線道路がある。私道はほとんどが砂利道だ。これら主要道路の保守作業は容易ではなく、当然ながらその方法も多様だ。主要幹線道路の保守作業は、専用機をもつ道路保守業者が請負う。それ以外の道路の場合、地方ではトラクタを作業に使用する業者が保守業務を実施するケースが増えている。

冬の除雪作業から夏の砂利道のわだちならしまで、道路保守でトラクタが活躍する場面は様々だ。加えて、道路わきの植物すべてを伐採し、切り揃え、運び出す作業がある。今では「道路保守」装備のトラクタはどこでも目にするものとなった。写真のジョンディア製トラクタを例に見てみよう。この独特の機体には、工業用タイプのタイヤが装着され、乗り心地が改善されている。このほか、業者は現在では幅広い種類の作業機を利用している。典型的な「道路用」トラクタはシャベルか除雪機を前装し、機体下部には油圧制御のブレードを付けることもある。後部には、冬期なら除雪フロフ、スリーポイント・ブレード、砂散布機などがあり、夏期ならこれらが取り外され、道路と均平にレベラが取り付けられる。



雪と氷が溶けると、道路を利用可能な状態に回復する作業が必要となる。このジョンディア社製トラクタは、機体下部に頑丈なブレードを、後部に道路をならすレベラを装着する。均平作業は一般に時速10kmで進む。



Spread the slurry far and wide  
オランダ

スラリを広範囲に散布する



散布バーの10の区画は、それぞれ単独で昇降する。クリークを越えての使用時にとても便利だ。



幅16.5mのアンビリカル・スプレッド・バーを、185馬力の新型マッセイファーガソン7495ダイナーVT無段変速トラクタに装着する。



オランダ・ロッテルダム市の西北、ツイドラントの村落で農作業請負業を営むファン・ベルヘイク氏。彼は近隣の顧客のために、糞尿のスラリ散布に幅16.5mのアンビリカル・スプレッド（条撒きタイプの散布機）を使用している。フェーンフェイス社製の本機の特徴は、その長い横幅のほかに、散布バーが全部で10区画に分割されていることだ。バーの区画の一つひとつが単独で昇降でき、スラリも別々に注入することができる。その結果、圃場の形状や畝幅の長さなどのような場合でも、散布バーが重複して通る部分の長さが1.65m以下に抑えられる。オランダの農家にとってさらに重要なのが、低海拔干拓地に散在するクリークを越えて散布バーが使用できることだ。

バーの幅が16.5mとなったのは、ファン・ベルヘイク氏のもつ長さ33mのスペーラーとの釣り合いがよいから。同氏の請負地域で作物へスラリ散布を行う際、機体に取り付ける補助車輪が1対ですむ。請負作業の内容はスラリ散布だが、冬期と夏期には小麦耕作地、トウモロコシとジャガイモの播種前にはその圃場へ行っている。散布バーは、フェーンフェイス社のフレームと部品を使用して、オルデルケルク市のデーター、チャルマ社が設計製造を行った。



作業場所を移動するとき、幅16.5mの散布バーは折りたたまれマッセイファーガソン7495トラクタの横幅に収まる長さとなる。

Stretch out in Big Sky country  
南アフリカ

青空の国のすじまき・肥料散布兼用機



幅19mのセーボ・テク社製ツールバーには、ジョンディーア社の播種ユニットを18台連結し、1時間で100ha分のトウモロコシを播種できる。けん引するのは、AGCO社のトラクタ、チャレンジャー。



南アフリカの西ケープ州ステレンボスにあるテーパー・テク社がこのほど、小麦、大麦など小さな種子の播種と肥料散布を行う、すじまき・肥料散布兼用機を開発した。

「イコライザー」と名付けられたこの機体は、けん引式の容器の中身を種子と肥料、あるいはトウモロコシ播種機と組み合わせでの使用時には3種の異なる肥料を別々に収納できる。同社ではオプション装備として、電子式可変速コントロールを提供している。この装置により、事前に設定したマップデータに応じて肥料を余分に散布するなど、精密な栽培作業を圃場全体で行うことが可能となる。

現在この兼用機は、トウモロコシ播種用の最大モデルで、幅19mのツールバーにジョンディーア社の播種ユニットを1m間隔で18台装着する。